



中村俊定文庫
文庫 18
262
2



清々文集巻第二

目録

- 一 春 くららのこころ
- 二 日列君ふてアチ
- 三 秋月法列業小遊
- 四 南紀奥野良一遊
- 五 花江伽羅之妙
- 六 待春の品 物清又春ノ格
- 七 朝貝の銘
- 八 巻之偈

九 新活二章

十 林夕君天賜を賀し奉る記

十一 熊洞氏の廣沢別荘小探ふ

十二 新活二章

十三 竹衣樹

十四 夏日下河原寓居

十五 夜光

十六 新波屋の松

十七 新活文ひろき

十八 与州高月氏、杖を贈る

十九 羈中慈書

二十 貝蓋の銘

廿一 洪水

廿二 青れ杓を贈し人の力と

廿三 義士行



我信孟子
語ヲ文曲スル
歟

第一 首のくさ

不在活下ハ
元ノ世ノ俗語
是ハ拙者ト云
心

祝詞ノ流
善クありの月
あつらん

黒牛の馬を馬牡丹の馬を馬。馬牡丹の馬は大馬の
馬なり。大馬は馬種白馬を馬。あま。其白馬
白馬の白馬あまは白馬乃おあふ。ひとの園
りと走根梅を馬く病を治らん常に吟よん不在
活下。活水の噴祇園を夕暮感神院社の名指我
抱る。西りと東ふ歩口の馬く夏腐我馬ル喜る音
たらくの馬く。あまを教の申ふつらぬき火急
りあふきて忽若人子施に。其時琥珀の涙を流
して樹の根すし屋の馬り短く暖比我あじ。



梅の下陰を望むと紅血津を人成殿の呪詛を醉
 せし。雅淳の妻は臨ふも照ふも或を悟のちと
 もたたりぬ。淮南の太子安室子ありて後。ふ
 も成してあり堂成拍へし。ぐし豆腐女
 ありしこの首なくてうらうらなさん。角ト有て
 鏡うらをさけて泣し。下下を要れ靈拍形
 んとすとまへ

豆腐女
 淮南子

太蘭君とて津領の葛一桶を初ふり

ちりり

三 日別君よりて

みはうらもつかう御素を初りまふ二ふ来はと
 てとやししは有むらま。こ流路の形樹緑おしく
 お白ひて。一果序まのゆを。孤山れ路のそり虎溪
 の氷音。むららも乃無ふ人実之枝を所ふ流風
 之矣君の代の婆也りり一句Pもらとて

孤山ノ序
 林和靖

別り夏朽ら奥山こつ々矣

三 秋月御別業之芳敏おけふ

む川ふはひひ奇

ふめとねハむへも寝たりきたるさの
 み川とら川とらふとの流るる

古今ノ序ヲ以
 テ祝シ
 者信也

とつろちり居

洞庭祥風

洞庭祥風乃及山麓水如系

三峰意出群

流ハ流しくして不盡三峰一

杜詩

我拓子。風聲たきあ慈并雨を深松小多子也。

晴暖けり忘部乃山麓ハ噴の香炉は通

青蓮橋の

我織した。多如たしハ握ちく朝を歌きて

維鵲巢を

つれ。小巖の枝く維鵲の巢我去先

十代の姑乃

子松家む小似る。躍るうれ。子代の所先の

一ツ三ツ四

一ツ三ツ四ツ。朱笠居さうまを披上まハ西山恭

聖公

夜樹を。海城高く日夜さめ月をむ之辰

辰の光り

の光ハ湛ふやた。名語く是共ふら

南山

南山家さを蘇。名語若や万を

風

風の形うい眼下ふ露あ。心れ上ふ

乃

乃乃神をぬつさ。海城ふせと園

け

けなく。句のちやれ非疾うくて。民

聲

聲なく園了。雲き亭子守也。池上乃

朱笠

とそ思夜我常と。と流去とも

吹

吹の爽食を村ふむ。吹之

新古今

新古今家持

烟是命
為予寫作
百梅園

文集二

月宴——烟を帯下梅の序

暮らうとれまへハ春此下道輝又言く。枯りて
ふさふささうく海く記あり。夏々水取をぬ
らうせ八時雨の雪子音茂む。鳴神の里を霞
ひ厚ハ終る子杜の唇を動し。雪子枝子語り
秋の姿ハさうふんした。月咲をきりて雪をちり
四時までのあうに満ていつは定人の法地さうん斜
陽よりち散いさあひ。後語載てうん噴煙気
来日此種来日れ答成へ。雪花一日中見うん法
う梅のそふハ

斜陽

謂有
議冊

西 南紀奥野氏、返書

魚の樂をアてふ一む。人其奥子解成投て
奥をさうふ者あり。釣網の為子海を離れ
て市に呼ま。生を先ふて價ひ活、奥子百倍也。
事を好むの志。平魚成、剪キリちて去りて
捨りて喜ひ。枚梅乃桶を彩カラダ又山巖成干てね
こくナツ索ひ。打是組、主子ぬれハ伯叔も子
を握って子供ふ斗り。さうぬいさたう。二夜の
味をあらう。藤ふ垣行。石成清め。茶家の家
く、以外の飯をさて魚成、病カウ一難スシと如く一酸

平魚ハ
鯛也

伯叔ハ
伯夷叔齊

以外の飯
茶子雜
茶ノ詰

文集二

才五 花江伽羅之助

即存老人才来。袋解解一志を完て一寸亀
皮出し。遠せく悠然として是を見て他事なく二指
を以て探すとれいよく六を藏也。客云名解也と
懐いて初く心れ敷る事の必有

玄衣 督郵 時君 元結

四谷ハ
亀ノ尾名

是よりして後程劫破一亭

花江伽羅之助 名附親談くと甲小才より
主人より甲小金粉錢をとりて爲給して。常小才
一其方も尾を引てむちうと信一。かく給とくの

予世外のおふとも云。客又云。亀名無きありさ

け。狂漢のこ。予云。古交物ううりよ。ひささし。新たま

一た事のまうら。新ふら。このは。らま

子とせぬ新に子花とちらん

と才新。ううり。一。我。字。作。及。師。鏡。して

飛。お。子。の。甚。法。目。新。を。取。ら。ひ。て

と連。分。し。て。通。く。を。結。び。竊。子。笑。可。給。ひ。し。を

誰。と。し。て。法。心。を。ら。後。向。を。果。た。大。め。く。め。め。と

も。わ。り。ら。ら。と。と。と

亀一名 玄介とも云

言ハ。通。り。あ。り
馬。子。の。新
ま。や。う。と。ら。め。り

けき形を新よ入してけき出—生本の枝を打て笑めて
 いさく心まうせふまゝまゝして何やうも知らぬ若くをして
 時打りけし出してきよあま—ては打ハ佛と打つやれ
 けきましく徴もてハ敷山なるをけより連々ききあう
 さねんまけけをくやくなをすししてたててゆり
 とおア—と云ち—まきりあうけへ一人の男きき
 りふいとのまの—みえう—アあ—ハ奇—もよ
 半たすう—まは—なま—身をと—う—怒—ハ
 常く大はハ掛を—けまの時ハた石の山もんよ—ゆい本
 年も同ふけう—りた—敷山ま—とあ—ま—て出立

入りきふむ—く—と—と—車牛の雷き—
 めき岩ま—う—朝陽のう—う—山は—伊勢り—の—
 年や—すり像よき井のあ—う—みん—う—さねま
 して獨打—言—詠言—て—こ—先—う—出—湖の
 風雪—あ—と—つ—な—う—て—吹—こ—む—の—白—い—や—く—ま
 らくま—人の心—り—う—如—大師の御—息—先—そ—く—けり—て
 相敷山よ—う—物—り—は—ち—へ—ま—ま—見—ハ—何—の—け—ま—ふ—け—も
 あ—う—た—あ—う—く—ま—茶—飯—不—加—減—の—て—ん—う—ま—ま—平—の—茶—此
 有—れ—う—け—り—ひ—く—物—り—く—志—あ—も—ま—ま—見—も—ま—ま—み—ハ—あ—で
 お—後—傍—ハ—香—盤—の—ち—う—絶—さ—う—と—佛—は—け—り—う—ま—ふ

世を離れしむるもむきたるべおの不加城をる世りち
ま集地をふいゆして群集さいつらんこねし藩子王城
の守護山と承り傳へし事ういふかし有難そんか又こ
いふぬあつた遠ううに堂山段うさうつと云推出
希うと世兩人の風雅れ有とねさとのそをいひ先是
非と論あれたりあり何藝よなても上子下子れん
的意箭者くうくねと一予例の老ひうこのい出本
てお度うのむへんさううも馬上うて坂をより
うしとおもひまらして六田よりいふも疲るるをう
て終り終りの引つけえおろしえ上ケて世々意花王堂

より至り

と一結山世界のむを歌くうい

や真実の風情世人を罵言して下りぬ

昔後志友の方より一歌吐し傳う折やんくうし下
の風色をううりかして吾もよりの歌うあれたる傳乃
洞宗といふもの真の序はあつて世れうも初て去年の
春西うりあつたよりむはたりしちあはとも柔原もねく
吟物もねくおく不日世ありと志息うてしああう山人
叡山ふも料理茶屋あわうしとおもつるうう仍てお白ハ
中出さたねうふき

仰らふとき。清し徳を秋津例のそ乃所代。長く
 傳へば正木のうつゝのむそ不まを布とま。後郊
 の民を撰天さう家派信を挿ひ。理を稱して
 まい忠のそを並し。心裁ゆと稱まのしたまひ
 くるよま。うゝ人日子をそ如く。見し能う利あり。
 武門の英氣凜ことして。ま光とそ原に埋まぬ玉
 柏奇消みはうゝ琢を成ス。澄ひふまこゝし志を
 らみあふ所州あり。夫ことして各其まなく。ほまき
 きき成るひ。ま景緑の帟を列衣をくべておぬ
 をぬすた。千花菊草よりまを結て文かゝぬや

玉柏奇嶺、
 石ヨリ生れ
 石菖也

うゝ人
新也

二二行あり
 毛ノウケ
 毛ノ
 毛ノ

こあめれおよれたもひきくはしこ。大己貴の法
 こころり叶ひ。ま宮一糸して香案よりとらん
 剽世州目所魔をかみし。僧部を延る成以常
 程中少も愛し終ふ。至まる哉時至まる。かそや
 の山陰より備へまふるま。志うくおはしこま
 有わく。あうこたるにおおしま。又難ひ
 あししをいし。勢のまおらうひ道瀧の池
 のほりふ挿とてまうりま。黄菊志まきく
 おそよま。日しうあわら哉時至まる。かそやの婦
 をねるま。ふままはく如時より。應して。志ま

禁中の廊下
 を勢のお
 と海とらう

あを屋まゝハ武士ガ之を成るやハあをの
志似をする者もあややん業の事ハ之
とおアありやう和尙云こわく極小を成ふ
和言も佛好志こも山上よとありハた極
あまふ哉と云いふもや作ありやう極ハ
和云く大業ハ釣極と云いハ畜生も是
大切のやういつまや成りて諸人感ハ
令く暫く畜生の心アリ正極もあ
まふくやれ貴人も暫く和道く中親
迦の教を聽得して佛の心裡ふけいハ

ふハ一極ハ淨極の魂を似まんやハ和道のあ
まふやう一極ハ先其法其及あまふ和經を
とて事くと云ふれ多れと極と云佛道を感
大と建立ありやうと云ふさうき哉一禪サカキ笑
哉佛印極ハ東坡も

才十三 竹衣術

多井ハ天ノ
字ト云天乃字を々して地ハ極也ハ多井の和つ
くアとなせらるも人乃世アリあり賢ぶおとひを
くじ。家子ありはふ所の意。法交あまむはじ
きあり。是をふ言にいと御く夏子祿よ介

るも秋萩の露痕をいひ。ふかく古され。其こ
 そ折ぬはる人なき。視度よのほのけり。人々
 四時推か。其ハ衣架ニツカケや。厚れ。その博士乃い。ほし
 く。鉄城と号け。そのお。一文多。紙様さぬ。すわ
 たして。いくし。うよむ。居さ。あん。准未と。書り。ても
 せ。及。漆。す。か。ひ。ほ。く。る。ひ。抽。し。き。ハ。二。陰。天。
 氣の白ひをとむ。黄か。紅。白。う。ち。や。う。く。せ。
 不。か。う。う。お。妙。も。乃。五。之。れ。眼。と。て。刻。と。か。し。傳。る。
 玉。う。け。二。足。れ。浦。際。上。の。う。う。き。く。松。と。千
 尊。も。為。絵。ふ。か。や。う。せ。一。陽。乃。力。と。光。り。深。く

十六點
 十六點

秋風の吹上
 小くく白
 菊ハ下略

二はーら。か。う。く。志。く。片。を。本。乃。角。と。お。有。ま。さ。の
 左。右。ふ。き。う。め。え。香。哉。妙。く。む。お。梅。お。家。を。奪。ふ。白
 中。い。ろ。く。あ。う。そ。よ。い。へ。も。嬰。葉。乃。香。と。あ。う。ね
 お。ん。ぞ。の。あ。や。し。き。を。け。か。う。が。や。と。折。ま。わ。り。お。ね
 ち。あ。ふ。青。し。け。る。と。あ。ま。さ。と。う。お。路。め。伽
 不。の。ま。れ。乃。宝。を。経。り。か。く。や。唯。乃。よ。の。好。く。紙。筋。法
 寺。か。お。ち。る。と。い。と。真。あ。存。り。釣。衣。柳。又。風。情。清。く。
 我。竹。衣。柳。ハ。破。り。あ。ま。あ。る。右。板。二。行。は。町。り。波。り
 を。も。我。お。り。と。あ。破。ふ。柱。も。か。う。く。と。う。く。や。釘。乃
 乃。と。お。の。道。候。あ。ま。は。小。若。れ。塊。乃。稀。り。紙。筋。が

嬰葉ノ香
 小くく白
 菊ハ下略

しくみはうしお翁よぬ屋しあやまきうり穴
 ちん。此君をまかすらあて四本并お後しが
 けち女乃あままとの。後のおそ布可下ふんじし
 けりとも母はね朽ちるうりうり。時々の神の
 ぬめくみあふ人がぬ。空しくおを寄る富老。冠
 小酔るぬ国の振ひ。衣乃林をほくまは。注田非
 常子お後神とふ神る子真成薄命を久しく
 真成薄命 尋思して憂まきうり後をうりく。あうり疑ひ
 久尋思とて
 見君王見
 後疑
 乃洞へ度。従り横は操ぬ染せうり。さあめくち
 後疑

くさ宿りかき海。漢書れ喜ハさうんさ

才十四 夏日下河原寓居

祝融
 禮記及
 山海經二説
 委之

南尔神あり。ひやの西尔ハ祝融といひ伝。火竜尔敵
 してんまぬくあゆさ成配るとや。志業アの日より。か
 神のさうせ給やんう。日輪午ふあうんとて凝。足
 午ふ尚まハ凝アてた成去る。志うえの山あなる。神
 も乾きてるハ凝とてとまり。ゆく牛席るるの毛海
 ましく整うて。池ハ泡をまらんとてあり。陽名戻ハ波ま
 掲るを想ふ。況や病海人又ハ百里の旅を二日神と
 るん。あ。ハ世の家まき子ハいと切んなくお後をうん

陽名戻ハ
 海底神也
 山海經

小自然の生さち。せ先取り。下成取り。おせ
 くれあけ。憎りのあま。人々。これのまらん
 ねさ。あ。ねより。そ。有世の境を。あ。あ
 され。高時乃。人。古。人の。非。を。あ。け。喫茶
 の。あ。れ。さ。ま。あ。と。あ。せ。家。も。皆。我。程。く。の。あ
 る。を。あ。く。た。古。人。れ。た。り。む。き。紙。也。あ。へ。く
 せ。地。を。り。き。れ。時。を。さ。う。く。た。自。然。一。て。た
 ろ。れ。種。を。配。る。竹。へ。一。片。雲。山。の。こ。こ。心。み。あ。り
 くらん。梧青杜府。あ。士。痛。む。衣。の。も。も。り。と。く。一。筋。ら
 ひ。く。く。ひ。火。城。也。き。甚。を。あ。り。と。く。く。く。く

梧青杜府
 各門人

風ノ乳
 茶ノ一各

奇袋
 けいぶくろ
 地ノ奇袋
 ちのきぶくろ
 おろろ
 おろろ
 おろろ

風を記す。風の乳。房。れ。車。た。を。煮。進。え。若。き。我
 好。み。破。心。一。詩。を。解。一。奇。体。を。布。き。東。流
 遊。び。西。流。り。り。乾。我。心。家。お。ひ。き。人
 一。如。く。れ。と。や。み。体。り。一。は。れ。こ。れ。口。さ。う。如。い。あ
 成。心。橋。の。有。る。人。を。到。の。邦。お。八。名。を。識
 室。を。定。め。た。下。を。定。め。ま。と。多。く。何。と。あ。り
 一。や。多。く。紙。や。中。と。魂。乃。は。ま。と。ハ。鏡。子。や。く。す。り。
 歩。り。は。く。一。み。お。小。懐。む。神。の。あ。の。程。く。
 竹。こ。く。如。く。ん。一。や。う。一。は。あ。の。あ。一。乃
 心。れ。し。む。け。ぬ。ん。志。う。も。け。奇。最。見。鄙。老。の

口ふつひん書お感きしり光傳。禱きし
 うけ東古人をぢみしつきなく病の外子
 くらふ。そ強や心をせしめん。釈書を讀て
 和音を心故きし時をさねし人。秋乃
 夜は月の光も寂しうりうりとす^備たるも。
 去ふ同笑風息出うし次して。表れ書ぢひさ
 ふおねもふらしくくねと二士を物さう。おぼて
 禿の心もさえぬさそのわく。清き海どふん
 かりは枕やけしふさくまはあつくくおをいひ
 せはいつてきくやとよみ傳りしう世に友

禅師指ハ
 一指禅ナリ

我胸上ニ
 ナリナリ
 ナリナリ

ふぢ己若と云ふ志の友ふをうりて。おとく
 さこのたれ光を縁て時あつて日あらん珠を
 んとの忠岑う心れろ。ひくわくね懐みし
 ひ傳りも。矢を以射るうとくし。せう形なり。
 いうく禅師の指を伝んや。古人若其矢を取
 つて投下した家^{ナリ}胸上^{ナリ}中^{ナリ}に^{ナリ}。驚りし行し
 心抱んや。心乃過ち憚らるてあつて
 とも光り形を玉れ。はきくお小突くとをけるは
 編る^ニ及^ニ形

第六 雜波屋松

病ふら
まゝくぬ

富士乃暖いとき我帰。庭のよひ雪を
てしこの花の鬼も三條の夕暮。芳根れむし
とよ万のりをる子代乃枝派。下固却く世家
のをめふけよのくま子入らん

一夜て凌草出あをみよしの又月を
よのそやめ影をぬまはせむかうてとみよ
侍

舟中 報信 ぬこひ語を

旅友ととい及る箱布商者有それ以小燈、旅通
ふはるへしちよといへるあま。旅通とこのとき

夏濃は流かへ事。渠と来らるる石くしき
まふく糖よ旅し。筆乃さぬはるなりし
家旅を孫をとおとひね。武門の岩く目から
形ふはるて△りやあし人目如き燈乃菴
なくも心のゆかぬ有と渡るをすこ
旅通便如くおとひ女合なまはるや其のよ
るこひ。洛外おれりしを信るる不華のねとこふ
て。とに流るるをいしかくま走しうりなれ者
り又婦の口きくかひ乃流のそと。歌列せんや
自らあるこのお通ふすへるまは。な旅るま

楯の上又ツ

浦清の里
楯の上
又ツの
人

初て便をして楯乃うへ五ツ水樂一費とて派
ちよう方へ一章に飯ありきとてあひさるる奇
△
中そちさるなり亭家よのきとけりう人の
そ語乃初くなくひをまはさるる如く業
ふとるはさ續き一にその秋をさるる友を
ち方ゆきとて女いよく歎きとて一してこの言
ひしを極て五條の楯れさふさほよひ月のあ
ふふあふふ他も。髪ささきおる語一
けよ一とてうの中そ歎きとてと續て

は入るを文ひ初けのちよやを呼りぬ。
はしと終不稀く知人ぬ一

才十八 与列高月表在るに杖を握る

杖と絡 蛟ミツチ娘と号く

後教雨と云 祇空杖と絡 幼童丸と号く

弊老の掃く杖 榎法茶

桃竹杖引
老杖の語
幸丸

蛟と字六杖劔或と蛟龍と重為告曰杖兮杖兮爾之生
也

甚正直 娘ハ其是娘の奇とてむまふ

甚正直は三字心アリ

世三文字心
杖主甚在馬
ト云

文集二

才十九 羈中愁夜

心ならず夜を更けし風雨浪を去て家も
夕斗をこよ海遠き枕をさしていねるく唐
の故乃寢を積もちるく人かこ構私の野
乃の園を吹ちるされ思ふあさう岸も清ふも
か不屋をこまに使もあひも志くぬ日乃本の
明る成侍恨む人のく海乃りきも是もいと
かしく痛むくもつて候をわけて一奴を候
をてし自ら候く人にも思ふてわたり乃言
新あやなきと波といひ候り候も思ふ人ふ

盗人も思ふ
斗のよる新
蒙求

うはりの家
生祇袖を
妻
現かうか
うたりて
まはれん
曲なりん

途日ありて其下細乃とをちきふもやるを
たさくはりのを乃。子侍を一衣二夜と。現かう
かありてとる形くををむり云独ありて
自らもやあると打撃ぬまは。忙然と下り座
しき家ほつとて根もぬく惜られ。鐘と十はの
かうと打受えく雨ふ嵐も形をきく。志こをなく
形りて文子ほし。とやより馳さ月れき。い
も。あうい遠くありをぬの。貧しき行脚の旅者哉
暮れんとあり乃若来ぬる。おきめされぬく。あや
冠弁も今いそむるはかり。漏くあやしき。あやも。

火うらちのま
いりついで
木のうらま
ういさつ
山休のうら
先とことんま

山休や借りとゆりきり経声を埒小紋
何事もやとや出せとやくと甚小いし
いさくかへーやとたゆやまきとく
くとおまき火うらちれきもこの
志ありきる小松とおのさあえる小
松法の。志乃をつかぬくむるの
さうりし。竹破ま雲惚りて客
拙くうろくまめか馬な成地
長くもくき哉や。お建ふ拙言も
らぬか。自ぬかへーや。續又唱
あまうけり

此れきり
志のうら
てはあふ
より外
もた

た休せは鳥のきりおろくま
まとのえふ月林ありり。一と
弁りる句り

一白ハタ
まうら

民きり茂常ふはさむや
は朝まかいいりりるを
ま枕り又午まをま

オニ 貝蓋銘

みーは水のそ積ちとけり
多座の光をそへる。時あり
まうとま。一飲三百杯乃を

酒池糟田
封本記

玉の光を月のかりり母。むれ鬼も雪のまうも心の
照さるよりとう世は波酒池乃あき不のあまれ
ゆき息をぬくと次は所往くや却てまた
ぶくさうく。久米乃さう山交り鬼をくま
の愁を拂ぬ其玉も光れ貝明くかや此銘玉割
と存る

オ北一 洪水

水成ゆき肌を捨冬^{ウチ}成りくま古巢を捨ふき
これの境を借し日紙包も月を偷み六月に至
り神て孫をさう下倍十月を存て神サも月と云

文の櫻之

一節は中川の
師くたき
長考

則神ある。水サも月のありき早月ふまう。雨
ふる日も水と成れあも皆以人乃さういれうと地
へ。樂しめらるはくむの掟なり。智者ハ其の
徳のく海を泳ぐす。清き流よん我流ふん。録平
於入まは丸うに春思ようとまハ角あり。ま
て。系は流是。彼をさしてハ名をいささ森を孫ひ
林を滅て出良。それ。幸徳の鏡とあまてハ漢史を
酒き約命をなくさめ榮船をよね。鬼の怒りて
るを歴せと背して骨いり。夜ふ咲た。みつあ
らまう。ういあまを。青我結ひく。中中川の産

今夕何夕ハ
老杜カ行ノ語ニ

とてもやれどもうけり。川あはせ堤為して棟を
敷き。今夕ハ何事此夕ハ何事交り行キ河中
蛟を射るのめ事此葉屋棟ノ船あり。早苗え
きその原より埋み存あり乃里く。里のふら
しむ里茂失ひ証味ひ古鼓呪う。岡こく船を
以のちを換んて真をえこ極。整く松下に倚て笑
て一句あり

臨るよぬかれ 跡を遺ふや 夢まふ葉

一ウ之意
富天云師子
敷人
雪川云故

あふき垣も世能彼の立所とて。斗り求てもや
めうこたや。有てきよのまじに覺て空一かうに。心ふ

きん一入海あういへん見晴る須知一。至ハ水窓の灯子
そらうり

元文一先結一六月上院

才正二 かく漬とよ拍哉

婦りく人乃ととく

かう結とのとふる。いのな海名ると世に禱く
論るる事ある。あうく形くは。或ハ糠よ漬る拍母
へ糠乃拍と云。又ハ大根を以テ神子供よすり
神の地と云。神くや云訓をかくとるぬへ一。
皆とら及り。禁中至聖而へ。女房の病とり

おかく我まゆくせよと呼時味時をてりしは
日本と古今交也。みそは漬くるをかくのこれ
とこそ。昔の字我下は平文字我用るは余情
あるはまなすは清のんちなるなり。善いあかち
ありり白ひまらるるなり。世に世に雅
の要とまなす有ん。まかく漬くるふあつて
糠は塩飯加へて大根を漬て。家く民くこの細
文れ事とまあつね。ま中ふ難を出来るもの
也。称しまかく漬と云。西域はあつ漬と云。こ
あつ漬。このちまかく我世のま白かくやままあつ。

細度の儀雲蒙那茶と到て凡情のこ海や
なりなり。おの日親月と云人よりかくれ物を
はく。ま味いひかく。まは羅葡萄ハ筑紫海菜
押、使使。却く好く。まおあひ。まあらん。ま
あ。まお登のまらるる。まおちたの。ままも
ら。ま日新まへ。ま純ま。ま此之乃歌ま成居。

筑紫
押使
花おるま

三月廿三 義士行

竭股眩之、力効忠貞之、節一繼之
以死真老臣心
人の體をまの、木の葉え。大よろは。ま

蜀相ハ
孔明ナリ

かゝるにそはねん。そりかゝるハ群士の忠
信。嗟蜀相を主歌くへ。噫音かうとそとあり
ぬ。天則賢ふあゝふ道ハ賢よあゝふ子も又名禪
アさうん。皆足平生慎乃みちと。おしこ
白ひと青一たを結ひく。巻こぬ。みよ一
あつこれ川の川流。感とみ一の義。乃足た
かふせもあゝあ結との月。影。其光の深き。故
をよふと。く。貴族の心ふ其光と。も
昔過まふと。長く光のと。悔る哉

其儀
孟子萬章

其義一や。く。蜀士の心さう

蜀士の心さう
不二平橋と

元文五年

よみく。奇先耳遠く先ハ不字と云人あり
馬丸光彦曰
さおほく。不。あ。蜀士のね。手。た。を。う。山。さ。う。か
かくれ。の。中。な。ん。ん

淡く文集卷之二終

